

## 大火

冬から春にかけて空気が乾燥し、季節風が吹くなど、火災が発生しやすい条件が高まります。このとき火災が起こると、辺りに燃え広がり、大規模な火災になることがあります。愛媛県新居浜市と高知県高知市の江戸時代の大火の例をご紹介します。

### ■別子銅山の大火（愛媛県新居浜市）

元禄7年（1694）4月25日、晴天続きで山が乾燥している中、別子銅山の焼鉱窯から飛んだ火が枯れ木に燃え移り、次第に火勢を増して、別子の山を被いました。被害はほとんど全施設に及び、勘場1軒、焼き窯400基、鉱夫小屋225軒、選鉱場23軒、銅蔵及び米蔵を焼きました。人々は逃げ場を失い、山をあちこちと右往左往し、立川銅山側から類焼防止のために放たれた迎え火によって挟み撃ちとなり、132人が焼死しました。住友家は、犠牲になった人々の霊をなぐさめるため、別子一帯を望む小高い丘の上に蘭塔婆（らんとうば）という墓所をつくり弔いました。蘭塔婆の墓碑は現在、瑞応寺の境内に移されています。＜参考資料：別子山村史編纂委員会編「別子山村史」1981年など＞



### ■高知の大火（高知県高知市）

享保12年（1727）2月1日午の下刻（午後1時）、小高坂越前町から出火し、火炎は西風にあおられて数条に分かれ、一手は城郭を全焼して永国寺町に及び、一手は尾戸から大川筋、愛宕町に延び、一手は京町、種崎町、農人町、山田町、鉄砲町を焼いて、その損害は侍町205戸、町方1,163戸、郷分397戸、合計1,765戸に達しました。翌日、再び越前町から出火し、帯屋町北側と南側東半部、鷹匠町の西部を残しただけで唐人町、雑喉場に至るまで焼いて、被害は侍屋敷187戸、町方1,304戸、郷分325戸、合計1,816戸に及びました。享保の大火により藩は困窮し、焼失した高知城が再建されたのは宝暦3年（1753）のことでした。＜参考資料：高知市史編纂委員会編「高知市史上巻」1958年など＞

